

次代を担う教師の育成に関する大学の役割と課題

平田 繁 橋本 義徳 日高 晃昭 田中 浩子

A Study of the Role and Challenges of Universities in Cultivating the Next Generation of Teachers

Shigeru Hirata Yoshinori Hashimoto Teruaki Hidaka Hiroko Tanaka

(2012年11月30日受理)

1 主題設定理由

(1) 研究の継続性から

われわれは先の研究¹⁾で、本学の在学生の意識、卒業生の勤務状態調査や国立大学法人の養成状況及び各種答申が述べている教員養成の在り方をもとに、教員養成大学(以後養成大学)としての改善の方向性を提言してきた。

21世紀は「知識基盤社会」と言われてから既に10年が経過している。このような中で教員養成については、平成22年に「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」の諮問が中央教育審議会に出された。教員養成は教育改革の中心的課題になっていることが窺われる。このような現実の中で、先の研究をもとに本大学と同様な私立養成大学における次代を担う資質・能力を身に付けた教員養成について考えていくことは養成大学としての使命と考えた。

また、先の研究で課題として挙げた平成25年度から実施される教職実践演習について、文部科学省が示している授業の具体的内容例を実現するためにも学校や教育委員会等との緊密な連携・協力状態をつくる必要であった。また、前回教育実習の充実について1年生から4年生までを通じてその充実を図る提案をしてきた。具体的には1年次に観察実習を位置づけている。2年次には基礎実習として「体験実習」を、3年次では本実習、そして4年次に研究実習を選択科目として位置づけるものであった。この提案は学部改組に伴う教育課程の編成の中で一部分実現されることになった。本来この科目はキャリア・デザイン形成を支援するために設置された科目であるが、入学生の卒業後の進路となる4つの場の内、保育所、幼稚園、小学校での観察実習が

位置付けられたのである。今後実習教育を充実させるために、観察実習の効果の考察が必要であり、このことによって学校や教育委員会との連携を図る方策をさぐることも可能になるのではないかと考えたからである。

(2) 学生の教職選択意識の実態から

ア 教職の選択と適性

本学学生に教職志望を意識した動機について質問してみると、小学校時代の担任教師の姿の影響を上げるものが多い。高橋らの研究²⁾でも教職志望を意識した時期を小・中・高のどの時期かを調査しているが、小学校教員志望の女子学生は小学校期に半数近くが決定しているという結果であった。女子学生が多い本学も、小学校教師の一人ひとりが分かるまで指導してくれた熱心さ、寄り添い励ましてくれたやさしさ、頑張ろうという勇気を与えてもらった喜びなど、当時の教師の姿の影響力が動機となっていることが窺われる。本学学生を対象にした柳らの研究³⁾でもこのことを裏付ける結果を示している。

また、高等学校での進路指導で教職への適性とやり甲斐や安定性等についての指導を受け、自らの将来について教職の道を選択した学生もいる。しかし、大学での講義を受けながら、自らの適性について戸惑いを感じている状況もあり、教職に携わるとしてもそれが幼児教育であるか小学校教育であるか特別支援教育であるかその選択に苦慮している姿があるし、一般職を視野に入れている学生も数名はいる。

本学では、人間発達学部から教育学部へと改組が行われ、入学後の1年生の前学期における観察実習等を通して自らの職業選択を視野に入れた

許資格取得を選択できる幅が拡充された。しかし、このことは再度家族と話し合う等、学生の主体的な選択を促す意味で価値あるものとなっている。また、免許取得については、可能な限り取得していくように家族から促されているものもあり、3～4の免許取得には大きな負担がかかることの説明を受け、その狭間で、家族への説得や大学での単位の取得計画、より充実した大学生活への展望について真剣に考え、対処している状況にある。このような時に観察実習において実際に自分で見た子ども達と現場教員の話聞いたことが教職を選択する意識に少なからず影響を及ぼすことが考えられであろう。さらに、小学校現場との連携・協力は以後の実践力形成のためにも必要となつてこよう。

イ 教職に携わる力量の醸成の観点から

教員としての基盤を培う契機となる内容として教育実習体験が挙げられる。本学の教育実習の手引にその意義について一つめには「自らを見つめ、高める場として生かしていくこと」が、二つめには「教育的識見を養い、実践的指導力を身に付け、豊かな心と広い視野をもった子どもを教育するにふさわしい教師として成長する機会であること」が記述されている。教員免許法による科目ということだけでなく教育現場での実践的な経験を通して教員としての実践的能力を培う場としての実習の重要性は言うまでもないものである。事実学生の実習以後の目的意識の向上は目覚ましいものである。実習の中で、授業づくりの難しさを克服することを通して得た喜びとともに、現場教師の熱心な姿から教職の価値と責任を感じ取ったことが窺われる。

このように見てくると、教育実習の充実が教職の責任の重大さとその喜びを感じ取り、自ら選択した教職の道を切り拓いていく意識と行動力を培う意味で重要な課題となつてくると思われる。1学年での観察実習、2学年でも基礎実習、3学年での本実習、4学年での教職実践演習という一連の実習体験によって自らの教職への適性を見つめ直すことは、学生の将来をより積極的なものにしていく上で価値ある学びとなつてくるものと思わ

れる。

また、学生にとって中村学園大学児童教育燦倫会^{註1)}による本学卒業生の現職教員との交流や研修は、自らの教師像を構築する上で大きな影響力をもっている。教職への希望の深化と大学での勉学の充実の必要性を意識させるといふ点で先輩教師の考え方や行動力は学生の課題意識をより確かなものとするにつながつている。

このように1年生からの実習体験や中村学園大学児童教育燦倫会との関わりは、教師への憧れや子どもと関わるのが好きだからという気持ちで選択した教職への道を、教育現場で確かな自分を培い、行動していく道へと切り拓くには厳しい現実が待ち受けていることを学ぶ機会となつていると考えられる。

2 主題の意味

(1) 次代を担う教師とは

次代を担う教師とは、変化が激しく、先行きが不透明な現在の社会状況の中、次代を担う子どもの教育に大きく関わる者である。「教育は国家百年の計」といわれ、「教育は人なり」といわれる所以である。そこで教師は、現在の社会・学校・家庭・地域状況の認識をもとに、目の前の子どもたちにどのような指導をし、どのような力を育成するかが、日本が今後も国際的な競争力を持ち、活力ある国家として、また、世界に貢献できる国家として発展していくための大きな鍵となる。新たな社会や未来を見据え、どのような状況になつても自らの力で、未来を拓くような子どもを育成することが教師には期待される。

ところがこのような期待に対し、「教師に対する信頼の揺らぎ」が保護者や国民から厳しく指摘されている。このようなことから次代を担う教師とは、絶えず研究と修養に努め、先見性、専門性、人間性を常に高め、社会の信頼にこたえていく教師のことである。

(2) 教師の育成とは

現在、教師の育成は大学の教職課程における「養

註1) 中村学園大学児童教育燦倫会は、平成8年11月に発足し、中村学園大学家政学部児童学科及び人間発達学部人間発達学科を卒業し、国公私立小学校、特殊教育諸学校に在籍する教職員並びに、中村学園大学教育学部教職員及びこの会の趣旨に賛同する者を以て構成している。会の目的は、会員相互の親睦を深め、信頼関係のネットワークを築くとともに、教育者としての品性陶冶及び資質の向上に資することである。活動としては、4月末に春季交流会（新卒教員と学生の交流）、9月中旬に秋季交流会（2年目の教員と学生の交流会）、11月末に定期総会・研修会・懇親会を開催している。

成」から始まり、教育委員会が行う「初任者研修」や「10年経験者研修」等、採用後の研修、校内研修、自主研修で行われている。養成大学においては、自らの教師像を明確に示し、その実現に向けて、体系的・計画的にカリキュラムを編成するとともに、その実施に必要な組織編成を行うなど、大学全体として組織的な指導體制の確立が求められている。また、教職課程の履修を通じて、学生が教職への理解を深め、教職に就くことに対する確固たる信念を持つことができるようにするとともに、専門的な知識・技能の修得はもとより、それらを自己の中で統合し、教員として必要な資質能力の全体を確実に形成することができるよう教職課程における教育内容や指導の充実を図ることが必要であるとされている。

これからの教員に求められる資質能力について、「教職全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」⁴⁾の中に、「①教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力、②専門職としての高度な知識・技能、③総合的な人間力の育成」が示されている。そしてこれらはそれぞれ独立して存在するのではなく、相互に関連しながら形成されることに留意することも必要だとの見解に立っている。この答申をみると、これからの教員の資質能力向上に今後ますます大学と教育委員会による連携・協力が重要となってくると考えられる。

(3) 養成校の役割とは

養成校における役割が教育職員養成審議会第一次答申の中に記述されている。それは教育職員免許法に定められた所定の単位を修得させ、「教職免許状」に関する質を保証することである。つまり、養成校においては、卒業時に教員として最小限必要な資質能力として挙げられている内容が身につけていることを保証することである。具体的には教職課程の個々の科目の履修により修得した専門的な知識・技能を基に、教員としての使命感や責任感、教育的愛情等を持って、学級や教科を担任しつつ、教科指導、生徒指導等の職務を著しい支障が生じることなく実践できる資質能力である。本学においても平成25年度から実施され4年生後期の「教職実践演習」において、①使命感や責任感、教育的愛情等に関すること、②社会性や対人関係能力に関すること、③児童生徒理解や学級経営等に関すること、④教科の指導力に関することの補完を十分に行い、卒業前の質の保証を十分に行われなければならない。この時に1年次からの観察実習等、現場との関わりの中で

教職課程を実施し、「教職実践演習」にしても小学校や教育委員会との連携・協力無しには効果を上げることができない。つまり、実践的指導力の育成を考えた場合、小学校現場や教育委員会との連携・協力を実現し、これからの養成校としての役割を明確にしなければならないのである。

3 研究の目標

教職課程を持つ教員養成系私立大学や教育行政機関の視察を通して、大学と教育現場、大学と教育行政の連携・協力の実態から本学の役割と課題を明らかにする。

4 研究の目標達成の方途

- (1) 教員養成系の私立大学を視察訪問し、学校や教育委員会との連携・協力の状況について明らかにする。
- (2) 教員養成に関わる取り組みを実施している教育委員会及び関係機関を視察したり、実施要項等を下に考察し、教育委員会等の意図を明らかにする。
- (3) 教育現場見学が計画されている科目であるスタディスキルⅡの「観察実習」の成果と課題から、連携の効果と今後の在り方を明らかにする。

5 研究の内容

(1) 教員養成系私立大学の状況

教員養成系私立大学として、四つの大学を訪問調査した。大学の理念や教育委員会等との連携・協力の状況等は表1の通りである。

訪問した各私立大学も国立系教員養成大学と同様、学生の教職志望の具体化や意欲化、教育的実践力の育成を図る上からも小学校現場との連携・協力を行っていた。教育委員会との協定書が存在する大学は2校で、その他の大学は確認が出来なかった。教育委員会との提携の経過については、地域の小学校や特別支援学校等の要望に沿う支援の実施、主にボランティア学生の派遣が機会となり、現場の必要性の実感により提携に至っていた。また、提携に至る過程に於いて、各大学の支援室の教職員（実務家教員の配置）の存在が大きく、現場との橋渡しを行っていた。なお、協定書の内容は、①教職員の資質向上に関すること、②現場のニーズに応える教員の養成に関すること、③学生による学校教育活動への支援、④教育上の諸課題に対応した調査・研究の

表1 教員養成系私立大学訪問調査

大学・学科	O大学 家政学部児童学科	M大学 文学部教育学科	A大学 文学部教育学科	K大学 教育学部現代教育学科
所在地	東京都千代田区	兵庫県西宮市	愛知県長久手市	奈良県北葛城郡
定員等	50名	学部として225名で小免希望者およそこの半数程度	多種の入学方法あり 前年度入学学生117名	140名
理念	① 生活体験や実習体験を通して子どもたちと直接かかわり、それぞれの成長を総合的に支援していくために必要な人間学的専門性を多面的に養う。 ② 子どもの専門家として、保育所や児童福祉施設の保育士、幼稚園や小学校の教員のみならず、子どもやファミリーに関連する企業などにも就職することのできる人材を育成する。 求める人 子どもとファミリーに強い関心を持ち、温かなまなざしがかかわれる人 2009年度小学校教諭採用 12名(同年度 中村学園大学15名) 企業他24名	「豊かな感性や人間性、創造的能力を持つ女性教育者の養成」この理念の下、複数の教員免許が取得できるカリキュラムを編成し、使命感を持った優れた教員を養成する。近年の厳しい就職状況においても、毎年高い採用試験合格率を誇り、多くの小学校・幼稚園・保育所・特別支援学校で働く女性教育者を輩出している。 2012年度採用 小学校教諭教育学科95名・他学科53名 合計148名(講師も含む) (同年度 中村学園大学 延べ65名、講師を含めると97名)	「違いを共に生きる」という理念のもとに、男女の性差だけでなく、国籍の違いを超え、外国人留学生や、年齢や世代の異なる社会人を受け入れており、今後は健常者と障がい者が共に学ぶこと、自然環境との共生などを視野にいれてこの理念の一層の充実をめざす。 教育学科は小学校教育と特別支援教育、生涯学習支援の人材育成を図っている。子どもたち一人ひとりの心に寄り添うことのできる人間性豊かな教員の育成を目指し、学校教育体験や教育フィールドワーク等の実習の場を1年次から段階的に行なっている。	「徳をのぼす」「知をみがく」「美をつくる」を教育の基本理念に置き、高潔な人格と幅広く高度な学識・技術を身につけ、以て地域社会の福祉と文化の創造に貢献できる有為な人材を育成することを目的とする。 教育学部の特徴として、教育の現場を少しでも早く体験し、子どもたちや現場の教師から学ぶことを重視している。 人間性を養う教養科目の充実と実践力をつける実習や体験プログラムの充実がある。学校教育コースでは、学校インターンシップを単位化して実践力のある教員養成をめざしている。 2010年度小学校採用試験結果
連携や実践 その他特徴ある取り組み	1. 児童教育学専攻の特色ある講義科目による育成 子どもNPO I・II 子どもファミリー・マーケティング I・II インターンシップII(教育機関) インターンシップIII(子ども関連機関・企業) 子どもの生活と援助(指導理論と方法) 2. 千代田区立九段小学校と連携した授業 プリズムタイム(2004年から活性化支援事業) ①「現場で学ぶ」を支える大学の教員・スタッフが、何を考慮して、学生にその価値をどう受け止めさせ、どのように開いていくか。 ② 九段小学校の概要 大学から80mに位置。学校規模は12学級、300人程度で中～小規模である。 教員は、平均年齢30歳後半で教職経験数年という若い教員が多い。「理数大好きモデル地域事業指定校」。 連携のきっかけは、遠方の子どがいっただん帰宅して習い事にまた出かけるという気態からその負担をなくすために放課後に子どもが学校に留まることを可能にし、その状況に対応するために小学校から大学に学生による支援の要請があったこと。 ③ 九段小学校との連携の内容 授業見学・支援活動を通年で行う。3チームに分かれ、3週間に1回の割合で終日小学校に入り1日の流れ、様々な場面を知ること、各場面を関係づけたらえ方をすることなど教職そのものへの理解を促す。水曜日は、児童が自主的な居残り勉強の場に学生が入って指導をする。地域行事へも参加し、保護者や地域の実態や地域の環境を学ぶ。	1. 学びの特長 ① 優秀な教育者を養成するために、深く幅広い学びを支援 ア 兵庫県教育委員会、西宮市教育委員会をはじめ近隣市町教育委員会との連携を図るために協定を結んでいる。 イ 大学の教員と小学校、教育委員会との連携の強化 研修会の講師として小学校に指導に行ったり、教育施策の立案に提言してきたりし、科目等履修で研修に教育現場から研修に来ていることなどで相互の交流を進め、教育委員会の連携が図りやすくなっている。 ウ 観察実習を依頼する小学校の開拓 諸資格指導室(校長先生、指導主事経験者等6名が正規の職員として専任) 各学校に募集をし、希望する学校へ教育ボランティアとして学生を派遣している。 エ 大学主催のシンポジウム「教員の資質能力の関わる基礎的調査」の開催 西宮市教育委員会教育次長、寝屋川市、東大阪市の小学校教諭、吹田市の小学校長などがこの調査及びシンポジウムに関わっている。 オ 神戸市の特別支援学校に、30名程度のボランティア学生を派遣。 ② 採用試験合格のために、授業以外でも強力にサポート ア ビデオ練習個室等の施設、設備の整備 イ 採用試験に向けた特別講座の開設 ③ 国際感覚を身に付けるために、海外留学プログラムを設定 西宮市内の小学校とアメリカの小学校の姉妹交流活動を学生がサポート ④ 特色あるカリキュラム 教職への道(2年次) アメリカの教育(3年次)	1. 1年次の学校体験実習の内容 町内7つの小学校へ分散して9月に1週間(5日)の学校教育体験を行なっている。 ・1週間は、割り当てられた学校へ各自早朝に登校し、勤務時間一杯在校 ・体験内容は、各学校に任せてあるが、観察、手伝い、給食、清掃、遊び等の触れ合い 観察内容は、授業観察、個人指導補助、教材作成補助等担任に任せてあり異なる ・事前指導は、学校教育体験の意義、体験内容と方法、諸注意等 ・事後指導は、学校体験記録簿提出、体験成果報告会 2. 体験実習に関する町教育委員会や学校との連携 (1) 大学と長久手町教育委員会と体験実習に関する協定を結ぶ (2) 体験受け入れ校7校への挨拶・依頼(実習学級や体験方法等は学校に任せる) (3) 体験実習担当教員15名で分担して実習中1回ずつ訪問 3. 体験実習の成果 ・教員への志願意識が高まっている。実習後主免許と副免許の選択申請 ・名古屋市や愛知県のサポーターへの応募につながっている。 ・実習協力校からは、喜ばれている。(各学校に内容を任せているので負担が少ない) 4. 2年次、3年次の体験 (1) 2年次は、教育フィールドワーク(教育ボランティア・実践報告と事例検討等) (2) 3年次は、本実習(名古屋市内で実習する場合は、市に申請し出身校以外に配属され、市を受験する義務が課せられる。市以外の県内の場合は、出身校での実習	2. 教育委員会や現場との連携協定 (1) 連携協定を結んでいる教育委員会等(大学としての連携協定) 以下の教育委員会と協定書を交わしている。 奈良市教育委員会、広陵町教育委員会、香芝市教育委員会、宇陀市教育委員会、大和高田市教育委員会、上牧町教育委員会、田原本町教育委員会、斑鳩町教育委員会、安堵町教育委員会 (2) 大学としての工夫 インターンシップの曜日を決め、その曜日には講義を入れていない。学校側の計画性に応えるため。 (3) 実務家教員の配置 教科教育を中心に6名の実務家教員を雇用している。(近隣市町村との関係強化) 教職支援センターを設置し、特任講師2名を雇用し、教職支援センター企画の採用試験対策等に関する業務を任せている。 (4) 成果や課題 学生が親身になって関わってくれ、ことで教員も子どももゆとりができていた。 教育実習に出た時に他大学の学生と違い、初日から子ども達との関係をスムーズに作れるとの声が多く聞かれる。また、将来に向けて、学生の意識が高まっている。 3. その他 ・1年次における付属幼稚園での「幼稚園見学実習」、2年次・3年次の「学校インターンシップ」、地域の子どもたちや保護者を大学に招いて行う「マミポコ・キッズ」「マミポコ親子広場」等がある。 ・年間を通した模擬授業の実施(教育課程外:希望者) ・夏休み期間の2次試験対策(全職員での実施)
アボラの対動のヘイ		教育ボランティア活動記録・単位認定申請書の提出によって単位認定をし、30時間1単位、年間の上限は4単位。		記録用紙を提出させ、単位化している。

※各大学には、2010年、M大学(9/10)、A大学(9/24)、O大学及び連携校(千代田区立九段小学校)(9/29)、K大学(10/13)に訪問した。本表作成に当たっては、一部2012年9月の各大学HPを参考に作成している。

実施、⑤学生の教育実習に関すること、⑥その他であった。これらは、教育委員会及び大学双方にとってメリットある内容である。提携や連携を進めるに当たって、教職支援センターが訪問大学に設置されており、連携・協力、推進の中心となっている。この部署は、現場経験教員を中心としたスタッフを数人配置し、企画・運営、学生への具体的な指導、及び採用試験対策も含めた指導も行っているところが殆どである。

教育委員会との提携後の具体的な活動内容については、小学校現場に一任している大学が多く、小学校に要望をするのではなく、小学校の現状に沿う活動ができるように融通性を持たせておくことが連携・協力を進める上では効果的であると思われる。小学校現場が大学生を引き受けることによりメリットを実感することで、学校長のみならず全教職員に連携・協力の必要性を促すことができると考えられる。大学が小学校現場と連携・協力を図り、進めていくためには、各小学校の抱える課題に対応するような形での連携を模索することが有効である。なお、各大学とも、観察（体験）実習やボランティア活動等が単位認定されており、これに伴って事前指導、事後指導を実施し、記録の提出及び時間割上の工夫が必要であることは明らかである。また、学校現場の要望に添いながら研修会講師としての繋がりを作っている大学もあり、何らかの形で接点を見出し、架け橋作りをして持続的な活動としていくことが期待されているようである。

(2) 教育行政の育成状況

① 「東京教師養成塾」及び「みたか教師力養成講座」について

東京教師養成塾は全国に先駆けて平成17年度から始められている。立ち上がった理由に共通する理念が見られる。それは、表2に示したとおり教師としての使命感と実践的指導力の育成を目指し、表3に示したように大学と教育委員会や小学校が連携して学生時代から教師養成を意図し、教育の質的向上を求めていることである。このことは、理論と実践

表2 東京教師養成塾 ゼミナール内容

回	テ ー マ
1	子供の意欲を高める教師の働き
2	「分かる」「できる」授業づくり（公開）
3	よりよい人間関係を築く
4	単元をつくる
5	保護者・地域から期待にこたえるために
6	一人一人が輝く学級づくり①
7	一人一人が輝く学級づくり②
8	フィールドワークを取り入れた学習
9	集団を把握する
10	授業を磨く
11	子供の心を育む
12	授業改善に向けた取組（公開）
13	学習活動をとおして学ぶ
14	自ら学び続ける教師であるために

※ゼミナールは、学習指導計画の作成や教材研究等を行い、各教科等の専門性や指導技術の向上を図ることを目的としている。（東京教師養成塾平成22年度実績）

表3 東京教師養成塾 講義内容

回	テ ー マ	講 師（敬称略）
1	かけがえのない子供たちを育てる	聖路加国際病院 小児総合医療センター長 細谷 亮太
2	心と心をつなぐ	大阪大学芸術学部教授・俳優 浜畑 賢吉
3	より高い目標にチャレンジする	俳優・キャスター サヘル・ローズ
4	心を開いて子供に寄り添う	目白大学保健医療学部教授 齋藤 佐和
5	ビジョンとイノベーション	株式会社ニチレイ代表取締役会長 浦野 光人
6	輝く自分を見付ける	バレーボール解説者 吉原 知子
7	あなたもわたしも大切な一人	聖徳大学教授 福田 弘
8	国際社会で活躍する	独立法人国際協力機構理事 橋本 栄治
9	技術を究めて、英知を発揮する	宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本部 対外協力室長・名誉教授 的川 泰宣
10	若き教師に期待する	東京都教職員研修センター研修部長 坂本 和良

※講義は、学校教育をめぐる様々な課題や広く教養を高めるための講義等をとおして、視野を広げ、社会性を養うことを目的としている。（東京教師養成塾平成22年度実績）

の一体化、形而上と形而下の統合化をもって国家的事業である教育の実施と振興に寄与する時代の到来を意味している。それは、これまで行われてきたそれぞれの機関が教員養成を単独で実施する時代は去り、これからは教員養成系大学と教育委員会と小学校が三位一体となって教員養成を図る新しい時代へと発想の転換を要請している。

しかしながら、このことに対して「大学における教員養成」の主体性が現実には脅かされているという養成大学側からの危機感も挙げられていた⁵⁾。しかし、連携大学が増加していることや塾の講師として養成大学からの協力関係をみると、新しい時代が進んでいることも感じられる。

また、「みたか教師力養成講座」の立ち上がりの理由にはコミュニティ・スクールの運営理念と深い関連がある。それは、三鷹市教育ビジョンによる義務教育9年間の質の高い教育に責任を持つ教師の確保を必要としているからである。そのために、コミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育への理解を深め、創意工夫と特色ある学校づくりに貢献する資質・能力を持った教員を確保する上からこの養成講座が表4のように組み立てられているのである。

「東京教師養成塾」及び「みたか教師力養成講座」における内容は、すでに本学での教科教育法や教職実践演習等の科目で実施される内容もあるが、一層充実する方向で内容の見直しと創造を図る必要がある。それは、授業科目の中で理論として学生に学修させるのみならず、その理論が教員としての実践的指導力として目指す技術や技能をも学修させることを求められているからである。

教育委員会が教師を志望する学生に対して求める教師としての最小限必要な資質・能力として、東京都は各教員養成系大学に、それぞれの理念や教師像を基にと言いつつも小学校教諭教職課程カリキュラム⁶⁾を策定し、送付して協力・要望をしている。その内容の一部は表5のようになっている。

教育行政の取り組みから、本学でもめざす教師像を基に教職課程を担当する教員で教職課程のカリキュラム検討の必要があるのではと考えられる。それは、平成18年の答申⁷⁾の中で課程認定大学の全ての教員が教員養成に携わっているという自覚を持つことの必要性が述べられていることからである。

② 「ふくおか教員養成セミナー」と福岡市立学校教職員候補者事前研修会について

福岡県教育委員会は、平成23年度から福岡県内の市町村立小学校教員を志望している連携大学（福岡教育大学他7大学）等の第3学年の学生を対象に、「ふくおか教員養成セミナー」を開催している。

表4 みたか教師力養成講座 秋期コース内容

回	講義内容
1	開講式・三鷹市教育委員会教育長による特別講義
2	特色ある三鷹の教育（CSと小中一貫教育）特別活動とその意義
3	模擬授業から学ぶ道徳授業 道徳授業の基本構想
4	学級経営の基本 授業の達人による国語授業
5	特別講義「教育と福祉」 授業の創り方（理科を通して）
6	情報機器を活用した授業 授業の達人による英語授業 魅力ある教師を目指して～子どもの接し方（child coaching）①
7	教育時事問題 授業の達人による算数授業 魅力ある教師を目指して～子どもの接し方（child coaching）②
8	小学校の授業と集会活動（教職の魅力） 中学校の授業と生活指導（教職の魅力） 魅力ある教師を目指して～授業力向上実践講座（プレゼンテーション）①
9	発達障害と特別支援教育 三鷹市の教育支援（特別支援教育） 魅力ある教師を目指して～授業力向上実践講座（プレゼンテーション）②
10	特別講義「グローバル社会が求める教師」 よく分かる楽しい授業の創造 魅力ある教師を目指して～授業力向上実践講座（プレゼンテーション）③
11	東京都教員採用試験『教職教養』傾向と対策 合格者から学ぶ『教職教養』対策 魅力ある教師を目指して～授業力向上実践講座（プレゼンテーション）④
12	論作文対策 合格者から学ぶ教員採用試験『論作文』対策 魅力ある教師を目指して～授業力向上実践講座（プレゼンテーション）⑤
13	東京都教員採用試験『専門教育』傾向と対策 合格者から学ぶ『専門教養』傾向と対策 魅力ある教師を目指して～授業力向上実践講座（プレゼンテーション）⑥
14	講義演習「これからの新しい教育の方向」
15	特別講義「これからの教育を担う教員志願者に望むこと」 閉講式

※春期実践コース、秋期実践コースの2回がある。春期コースは教員採用試験を意識した内容であり、秋期コースは授業実践力の育成を意識した内容となっている。（平成23年度実績）

表5 東京都教育委員会が求める教師として最小限必要な資質・能力

<p>領域1 「教師の在り方に関する領域」</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 教師の仕事に対する使命感と豊かな人間性に関する内容 ② 教師として必要な教養に関する内容 ③ コミュニケーション能力と対人関係育成に関する内容 ④ 学校教育に関する法令等と学校教育の役割に関する内容 ⑤ 学校組織及びサービスの厳正に関する内容 <p>領域2 「各教科等における実践的な指導力に関する領域」</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 学習指導要領に示されている目標や指導事項及び指導上の留意事項 ② 的確な教材研究・教材解釈に基づく授業づくりに関する内容 ③ 単元指導計画の作成及び改善に関する内容 ④ 指導方法及び指導技術に関する内容 ⑤ 児童の学習状況の把握と評価に関する内容 ⑥ 授業力向上と授業改善に関する内容 ⑦ 特別支援教育に関する内容 ⑧ キャリア教育に関する内容 <p>領域3 「学級経営の関する領域」</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 学級経営の意義と学級づくりに関する内容 ② 集団の把握と生活指導に関する内容 ③ 児童理解と教育相談に関する内容 ④ 保護者・地域との連携に関する内容 	(東京都教育委員会 平成22年10月)
---	---------------------

目的は、「福岡県の公立学校教員を目指す、又は職業選択として興味を持つ学生の皆さんに、職業としての教員の魅力や職務内容等を十分に周知し、教職に対する熱意を醸成するとともに、講話や優秀教員による模擬授業及び講義等を通して、本県の魅力ある教育実践に触れる機会を提供する」⁸⁾とあり、大量採用時代に向け、福岡県公立学校教員志望者を確保し、ひいては採用試験倍率の低下を阻止することにより、教員の質の維持が意図のようである。

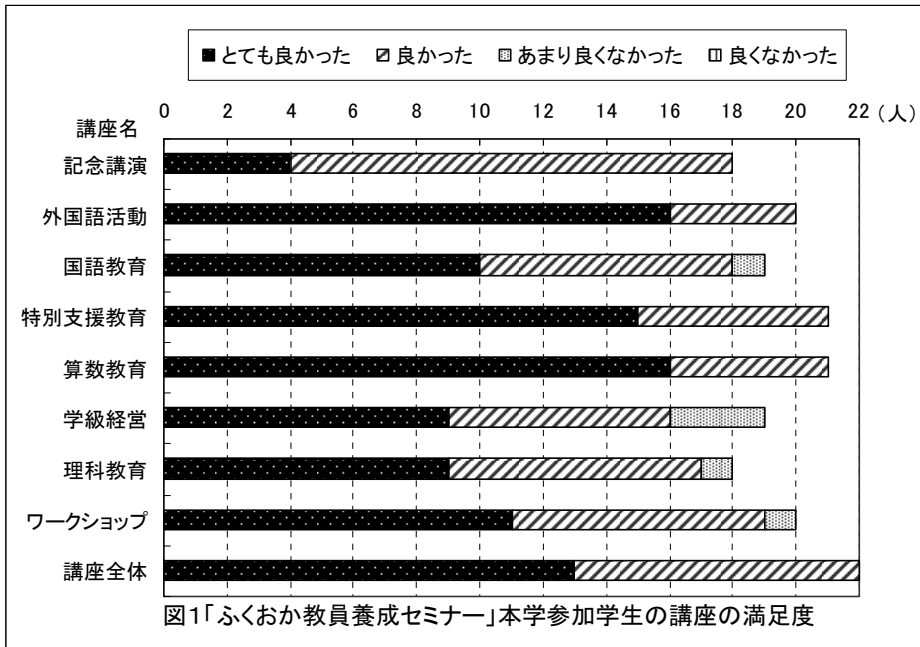
本学学生のふくおか教員養成セミナーへの参加満足度の結果は、図1の通りであった。福岡県教育委員会の発表によると、受講者の評価結果は、「極めて高い」ということであった⁹⁾。本セミナーへの参加学生は、4週間の教育実習を終えたばかりの学生である。実習を終えて本気で教職を考えている学生には沢山の課題ができた中、夢の実現に向けて願ってもないセミナーであったであろう。特に、目の前の子ども達に対する指導の不十分さには切実な思いがあるはずである。そのような中、学校現場の具体的な話や指導法、模擬授業は、学生達の夢の実現に向け、課題を解決していくこととなったと言える。「ふくおか教員養成セミナー」は、学生の要望に応え、適時性という面で効果が期待できる。それは、教育実習後の学修及び4年生での学びが教育現場に立ったとき具体的な指導に繋がるからである。とす

れば、「ふくおか教員養成セミナー」での学修内容と繋がるようなカリキュラムの必要性を提起していると考えられる。そういう意味で「教職実践演習」の設置の意義の確認とともに、本演習にある項目について着実に身に付けた学生を福岡県教育委員会は、大学側へ期待し、警鐘を鳴らしていると言えるのである。

また、福岡市教育委員会は、平成20年度採用者から学校教職員候補者(採用試験合格者)に対して事前研修を行っている。本研修の目的は、「教育公務員としての心構え、教職員としての業務について事前に学ぶことにより、教育活動を円滑に行うことができるようにする」¹⁰⁾としている。

研修日程を見ると、「教育公務員としての心構え」に関わる内容は、「教職員の使命」として20分程度で、他は「先輩教員の話」や「接遇(来校者対応及び電話対応)」、「授業の進め方」等で、「教育活動を円滑に行うことができる」に関わる内容に力を入れていることが分かる。新規採用後は、他の教員と同等の職務を年度当初から遂行しなければならない教員としての特殊性から、「実践的指導力」に関わる内容が本研修の中心をなしていると言える。

第1回、第2回の配布資料を見ると、各教科の授業の進め方やある単元の具体的な指導展開例が大部分であるが、短時間の中に沢山の教科等の講話が組



※各回の講座内容に関して4件法（Aとても良かった B良かった Cあまり良くなかった D良くなかった）により評価した。記念講演から算数教育についてのアンケート調査は、平成24年1月末実施、学級経営から講座全体までの調査は、平成24年2月末に実施した。22名に達しないのは、欠席者がいたためである。

み込まれているため、一方通行で消化不良になることが予想される。実際に参加した新規採用予定者からは、「大切な話ではあるが」との感想が聞かれた。このようなことから「実践的指導力」を目指してはいるものの、あくまでも新規採用予定者への心の準備として実施していると言える。

福岡市教育委員会の事前研修会は、養成課程を持つ大学に対して、最低でもスムーズな教職生活のスタートができるだけの基本的な意識づくり（授業の進め方）を特に求めていると言える。

以上のことから、「ふくおか教員養成セミナー」は、教員採用試験受験前に適格者の確保を意図している。福岡市立学校教職員候補者（採用試験合格者）事前研修会は、採用時に教員として最小限必要な資質能力の意識づくりを意図していると言える。

両教育委員会で実施されたものは、平成25年度から実施する「教職実践演習」の内容と重なる部分も多く、互いの内容を意識して重複させ並行して行うのか、割愛するのかの検討見直しが本学には必要であろう。いずれにしても、めざす教師像のもとに、次代を担う教師の養成を考え、教育委員会の教員養成・研修を一体的に考え、具体的な連携・協力の必要性が存在している。その中で、個々の授業科目で理論と実践を結び付ける工夫が必要となってくる。

例えば、福岡県や福岡市等の優れた教師を招聘し、その教師の優れた発想と技術を授業科目に取り込むことである。このような工夫により、学生にとって魅力のある科目へと充実・転換をすることができる。ひいてはこのことを通して、芯のある凛とした本大学出身の教員が生まれることが期待される。その際、それぞれの科目の必要に応じて外部人材を活用できる基盤づくりをする必要がある。特に、教育現場の人材を活用する上で、教育委員会との信頼関係は重要である。そのために、本学の学生が教育ボランティアとして各小学校で活動する学生数や活動場面を増やして県下小学校への貢献度を高めること、各種研修会への講師としての協力、公的委員会への委員就任なども必要となってくる。

結論として簡潔に表現すれば、次代を担う教師の育成を連携して行うためには大学も教育委員会も教育現場もそれぞれの養成意図が達成できるような関係となるようにしなければならないと言える。

(3) 本学における育成状況

ア 1年生のスタデイスキルⅡでみる育成状況

1年生のスタデイスキルⅡで実施された観察実習の結果から成果を検討した。

観察実習は6月～7月に実施し、保育所・幼稚

園・小学校で半日規模の観察実習をクラスごとに実施したものである。この観察実習の結果は小学校の観察実習後に書かれた振り返りシートに記載されたものである。

(ア) 調査対象者：教育学部1年生86名

(イ) 振り返りシート分析の意義：調査対象者は平成24年度教育学部入学生の1年生で、すでに取得希望免許・資格を決定しているものも予想されるがスタディスキルⅡの到達目標は「各個人の卒業後のキャリアを明確に意識化すること」であることから、スタディスキルⅡの観察実習は進路選択の大きな要素となるものである。この観察実習は小学校滞在時間をおよそ2時間程度とお願いし、各学校とその内容を打ち合わせ、実施している。小学校で学生は何を見て、何を感じ、さらにこの実習を通じて自らの進路に対する考えの変化や深まりについて記述していることを分析することは、今後の観察実習の内容検討になり、ひいては実習教育の充実にもつながることが期待できると考えたからである。

(ウ) 分析方法：振り返りシートの記述内容を分析する方法として、分析対象の記述文を構成している文言をカテゴリーごとに分類し、その記述文の思いや考えを読み取り同一カテゴリー別にカウントする方法を採用した。具体的には振り返りシートに記述された文章を1文ごとに、その中に含まれていた文言をカウントし分類した。なお、振り返りシートのレポート内容は、①実習で気付いたこと、②実習中の子どもの様子や先生とのかかわりについて、③この観察実習をとおして、自らのキャリアデザインに対する変化や深まりについての3点について記述する用紙が配布されていた。②については観察した内容とその意味についても記述するようになっていたが、ほとんどの学生はこのことについての記述がなかったこともあり、子どもと先生とのかかわりについてのみ集計した。

なお、3クラスを分析したが観察時間帯が異なっていたこともあり、クラスごとに集計し全体を検討した。

(エ) 対象クラスの観察時間帯について

対象クラスの観察時間等については、下の表6の通りである。なお、A、Cのクラスは同じ学校での実習であった。

(オ) 結果及び考察

① 「実習で気付いたこと」について

結果を表7に示した。調査対象者のそれぞれの記述数はAクラスが98、Bクラスが75、Cクラスが64であった。この中で3クラスともに「子どもの様子」の記述が最も多く、Aクラスでは34.7%、Bクラスも37.4%、Cクラスが48.4%であった。次いで多いものは、Aクラスは「授業の様子」で25.5%であり、Bクラスは「給食の様子」の28.0%、Cクラスは「先生の様子」の21.9%であった。学生の目は小学校で生活する子どもに観察の視点が注がれていることが分かり、さらに観察時間帯で観察内容が異なっていることが推察できる。

② 実習中の子どもの様子や先生とのかかわりについて

結果を表8に示した。記述数を見てみるとAクラスは77、Bクラスは83、Cクラスは75であった。Aクラスは「先生の様子について」が46.7%で最も多く、次いで「子どもの様子」の24.7%、この2項目で71.4%である。Bクラスは「給食時間」25.3%、「昼休みの活動」20.5%、「掃除の時間」18.1%で全体の63.9%になっている。Cクラスは「先生の様子」が36.0%で最も多くその他の項目にあまり大きな差は見られない。この結果を見ると当然なことであるが、観察時間帯で学生の記述内容は大きく異なっていることが分かる。また、AクラスとCクラスは、「先生の様子」を記載したものが最も多い。これは授業が観察時間帯にあり、そこでの先生の存在が大きく影響していると考えられる。それはBクラスの「先生の様子」の記述割合の低さからも推察できる。また、Bクラスに「学生に対する子どもの様子」の記述が15.7%見られるが、これは給食時間、昼休み時間、掃除の時間といった活動が子どもと学生との直接的に話すことを可能にし、親しみをもって、触れ合っている結果であると考え

表6 対象クラスの観察時間

クラス名 (人数)	観察内容	天 候	それまでの観察実習の有無
Aクラス (30人)	昼休み→掃除→5時間目の授業	晴 (6/28)	保育園実習終了後
Bクラス (28人)	給食時間→昼休み→掃除	晴 (6/7)	第1回目の実習
Cクラス (28人)	昼休み→掃除→5時間目の授業	晴 (7/12)	保育所・幼稚園実習終了後

表7 実習で気付いたことについて

	カテゴリとその具体的な内容(人数)		
	Aクラス	Bクラス	Cクラス
子どもの様	挨拶に対して(13) 元気さ・明るさ・大きな声(10) しっかきしている(3) いろいろな子ども(2) 呼び方(1) 体の大きさ(1) 幼さ(1) 走り回る 助け合っている(各1) 計:34 34.7%	明るい・元気(6) 話しかけてくる(5) 挨拶に対して(1) ケンカがあった(1) 思ったことをすぐ言う(各3) 個人差(1) 考えて行動(1) 夢中になる(1) 小さい(1) きちんとできる(1) だちを大切に(1) マナーがいい(1) いろいろな子ども(各1) 計:28 37.4%	挨拶に対して(12) ケジメがある(6) 呼び方(1) 純粋・素直(各2) 集団行動徹底(1) リーダーになる子(1) 子ども同士で解決(1) 元気(1) 伸び伸び(1) 応援し合う(1) 聴き方について(1) 小1は小さい(各1) 計:31 48.4%
学校の様子	掲示物への気付き(6) 扇風機がある(4) 自分のときと違う(1) 廊下の右側通行、保青園と違う(各1) 計:13 13.3%	掲示物 階段の工夫(各1) 計:2 2.7%	掲示物(1) 計:1 1.6%
先生の様子	メリハリがある(1) 遊んでいる(1) 優しく見ている(1) 援助が少ない(1) 昼休み遊んでいる(各1) 計:6 6.1%	ほめている(1) 考えさせている(各2) 関係良好(1) 昼休み遊ぶ(1) 怒っている(各1) 計:7 9.3%	メリハリがある(3) 工夫している(1) さん付けで呼ぶ(1) 先生によって違う(各2) お手本(1) 全体を見て(1) テキパキ動く(1) 賞を出したり(1) 大きな声(各1) 計:14 21.9%
授業の様子	授業のルーールの存在(9) 発表の仕方(4) 集中している(1) 休み時間と違う(各2) 積極的(1) 姿勢がいい(1) 私語がない(1) リズムがある(1) 自分で考えてそれから人と考える(1) 読み方がすこい(1) 自主性がある(1) 音楽が流れている(各1) 計:25 25.5%	発表の仕方(3) 積極的(1) いろいろな意見(1) 1人1人の意見を付け加えていく(1) 1年生には平仮名にも難しい字がある(1) 集中している(1) 一生懸命(1) 伝わっていない(各1) 計:10 15.6%	
給食の様	黒板にカーテンをしている(12) 給食ナプキンを使用(6) おしやべりで遅い(2) 注意しても聞かない(1) 計:21 28.0%		
昼休みの様子	クラスの日の存在(3) 楽しそう(1) 委員会活動(1) 危険(1) 雑(各1) 計:7 9.3%		委員会活動の紙芝居(1) 幼保と違う(各1) 計:2 3.1%
教室の様子	高さが低い(4) 机の並べ方(3) 床にマーク(1) 椅子の高さが違う(各2) 良さが張り出されている(1) 窓が高い(各1) 計:13 13.3%	椅子にテニスボール(4) 計:4 5.3%	椅子の高さが違う(1) 計:1 1.6%
掃除の様	役割活動(1) 協力(1) やらない子(1) テキパキ動く(各1) 計:4 5.3%		
その他	大変そう(1) 教科書がカラフル(1) 縦割りで遊ぶ(1) 支援学級の工夫(1) 持ち物(1) 時計の活用(1) 掃除が無言(各1) 計:7 7.1%	午前中5時間(1) 小中連携の姿(各1) 計:2 2.7%	支援学級に対しての感想(4) 声かけが大事そう(1) 計:5 7.8%
	合計:98 100.0%	合計:75 100.0%	合計:64 100.0%

表8 実習中の子ども様子の様子や先生のかかわりについて

	カテゴリとその具体的な内容(人数)		
	Aクラス	Bクラス	Cクラス
子どもの様子	計:19 24.7% 挨拶 (10) 敬語使用 (2) 礼儀正しい 静かに聞く 仲良く 信頼関係 よく見ている 助け合い 自分の考え (各1)	計:5 6.0% 譲り合っている ませている まとめ役がいる 喧嘩が多い いろいろな子の存在 (各1)	計:11 14.7% 敬語使用 (3) しっかりしている 元気 (各2) 気持ちのいい挨拶 はきはき返答 個人差大 お互いに応援 (各1)
先生の様子	計:36 46.7% ほめる (10) 気持ちの切り替え (6) ヒントとアドバイスの提供 しかる (各5) 間違いに修正を加えながら 時間の提示 しっかり考えさせる 危険への配慮 (各2) はつきり話す モデル (各1)	計:10 12.0% しっかり悪い時は叱る (5) メリハリがある (2) きちんと対応 考えさせる 厳しい (各1)	計:27 36.0% メリハリがある (5) 応援している (3) 自主的に 安全への配慮 はつきり話せるように 悪いことは許さない 気持ちの切り替え (各2) すごい けじめをつける 面白いことをいう モデル 考えさせる きちんとした授業 個別指導も 集団として 成長させる (各1)
昼休みの中で	計:11 14.3% 縦割り遊ぶ (5) 先生も加わって (2) 先生は少ない 協力し合い 星休みは外が多い 1から6年生のドッジは難しそう (各1)	計:17 20.5% ほとんど外で (3) 衝突 積極的 伸び伸びと あぶない 先生も加わって 喧嘩も (各2) 技能差大 以前と同じ遊び (各1)	計:13 17.3% 自分たちで考えて (4) 外遊びを進める 元気 室内にもいる (各2) マジックの日がある トラブルは自分たちで解決 委員会活動 (各1)
給食	計:1 1.3% その子に応じて (1)	計:21 25.3% 当番の役割 (5) 食べる時間それぞれ 感謝のあいさつ この字型で 先生の指導 (各3) 早い人への対応 遅い人も片付ける 最後まで残さず 残す人は申告 (各1)	計:11 14.7% 立って食べる子 (3) 食べる時間それぞれ 当番活動について 完食指導 (各2) 牛乳パックは洗って くるまでごみ拾い (各1)
掃除	計:3 3.9% サボる子なし 反省会あり (各1) 見ているだけの子	計:15 18.1% 丁寧 (6) 先生の指導 (3) サボる子 (2) しやべらない 協力し合って 喧嘩が続く (各1) 早く終わったらご褒美	計:12 16.0% 先生も一緒 (3) 一生懸命 協力しながら (各2) 子ども同士注意 きちんと指導 できたらほめる しやべらずごみの分別 (各1)
学校生活	計:7 9.1% 生活のルール (4) 協力的 先生の話をしっかり聞く 切り替えができる (各1)	計:2 2.4% メリハリがある (2)	
学生に対して		計:13 15.7% なんでも聞いてくる 興味をもって (各4) ませている しっかり挨拶 教えてくれる いろいろな反応 子どもからも感想 (各1)	
その他			計:1 1.3% 体を動かしながらの音楽の授業 (1)
	合計:77 100.0%	合計:83 100.0%	合計:75 100.0%

表9 観察実習を通して、自らのキャリアデザインに対する考えの変化や深まり

		カネコリドその具体的な内容(人数)	
		Aクラス	Bクラス
		Cクラス	
全体印象	すばらしい(3) 衝撃的 子どもを守りたい(各1)	計:5 5.6%	計:3 3.2%
進路について	一層思う 小学校もいいな(各3) 行って役に立った 憧れただけはだめ はっきりしたい いらなそうと思ていたが(各1)	計:10 11.2%	計:11 11.6%
職業観	やりがいがある(2) マナーが大事 責任がある 成長がみられる 自分も成長(各1)	計:6 6.7%	計:9 9.5%
先生方への見	難しさ美感(4) 伝え方重要(2) 多忙 愛情が必要 体力必要 尊敬の念 積極的 興味深い 伸ばす授業 子どもへの対応重要 厳しそう 気付かなければ(各1)	計:18 20.2%	計:21 22.0%
子どもの姿	元気 いろいろな子(各4) 礼儀正しい(3) 考えて行動 思ったより大人 きちんとできる はっきり話す(各2) 明るい 集団行動多い まじめ かわいい 顔負け(各1)	計:24 27.1%	計:27 28.4%
これから	体力づくり(4) 学びたい 成長したい(各3) しっかり考えたい 学サボをや マナーを直したい 強い気持ちを持ちたい(各2) 恥じない大人に 子どもに素直に コミュニケーション能力を 生活習慣の改善 叱り方を学びたい(各1)	計:23 25.8%	計:19 20.0%
その他	教頭先生の話に感激(2) 子どもの手紙に感激(1)	計:3 3.4%	計:5 5.3%
		合計:89 100.0%	合計:95 100.0%
		合計:82 100.0%	

夢が膨らんだ(2) みんなと目標に向かう子どもたち 幼保と違う(各1)

楽しかった 新鮮だった 感動した(各1)

一層思う(4) 迷う(3) 貴重な体験(2) 小も取りたい なりたいたいまでは(各1)

素晴らしいだろう やりがいありそう(各2) 難しそう 責任がある 影響大 観察必要 切り替え大事(各1)

大変そう(8) メリハリ必要 上から目線はだめ(各3) 子どもを支える(2) 子どもの把握重要 喧嘩への対応 叱るだけでなく 自主性重視 テキパキ行動(各1)

かわいいいい(5) 元気・にぎやか(4) 個人差大 個性豊か 受け入れる(各3) 協力し合う 対立多い(各2) なんでも疑問 しっかり聞く 隠さない 楽しく遊ぶ ルールに沿って行動(各1)

元一杯 幼児期と違う 1年が大きい 素直 けじめ ができる 大人 礼儀・挨拶ができる 思う通りに はならない(各1)

正しく導けるように 授業を大切に 挨拶のできる子に 幼と小を繋げたい 頑張りたい 子どもと触れたい 実習を生かしたい 体力づくりを 叱り方を学びたい CDと使わない授業をしたい スキルを上げたい メリハリのある学級作りをしたい(各1)

自分の体力のなさ実感 ベテランの先生で良かった(各1)

られる。

③ この観察実習を通してのキャリアデザインに対する考え方の変化や深まりについて

結果を表9に示した。記述数をみるとAクラス89, Bクラス95, Cクラス52であった。Aクラスは「子どもの姿」についての記述が最も多く27.1%, 次いで「これから」が25.8%であり, BクラスはAクラス同様に「子どもの姿」が28.4%で最も多く, 次いで「先生の見方」が22.0%と続いている。Cクラスは「先生への見方」と「これから」が最も多く23.1%である。この観察実習が児童理解, 職業理解の一助になっていることが窺われる。また, 科目の到達目標であるキャリアの意識化についても進路決定についても影響を与えていることが明らかになった。

また, 「これから」とまとめることができた内容が多く, 意欲をもって学生生活を送ろうとする学生の意識に刺激となっていることが見られた。自分の適性を考える機会となったこと, これからの学生生活の過ごし方に関する意欲づくりに観察実習が影響を与えていることは, 実習教育の充実を図る意図で提案してきた著者らにとってはうれしい結果となった。

さらに今後は観察実習終了後, このまとめの授業をできないものかと思えてくる。それは今回の貴重な小学校での体験の刺激が今後の学生生活を充実させていくことにつながると思えるからである。実習校の校長などの参加を願ひし, 学生の話し合いの結果を報告する会の開催なども, 地道な教育現場との連携につながっていくとも考えられる。何よりも学生自身が他の学生のレポート内容を知ることによって, 意識の共有と同時に気付きの機会ともなり, 教員としての使命感や実践的指導力の充足に少なからず影響を与えるものと考えられるからである。

なお, この3クラスの学生の免許資格希望調査の7月末時点の結果をみると小学校免許20人程度, 幼稚園免許25人程度, 保育士資格17名程度であり3クラスとも同じ傾向であった。このことから, 3クラスに差はないと判断している。

イ 学生サポーター制度による育成

さらに先の研究¹⁾で, 学校理解, 児童理解, 保護者理解, 教職に対する理解を進めるためのインターンシップなどの現場体験の充実を図るために, 学生サポーター制度の有効活用の推進を挙げている。このことは平成24年度の申し込み状況が福岡市内の小学校31校, 特別支援学校2校となり学生数96名が参加している状況にある。この制度には以前, 学科内で, 選択科目の履修率低下につながるなどの問題点も指摘されていたが, 時間割に工夫を加えることでこの問題を解決することができている。このことも参加学生増加につながっていると考えられる。

この活動の中で, 子ども理解, 教職への理解, 子どもを取り巻く学校を含む環境への理解が進むだけではなく, 各小学校での学生理解は大学への協力・連携へもつながることが期待できる。また, このような積み重ねが日常的な大学と小学校との往還型学びにもなってくるのではと期待したいところである。今後この活動について充実を図るためにも単位化の検討が必要な時期になったのではと考えている。

6 研究のまとめ

(1) 本学の役割

教員養成系私立大学や教育行政機関の視察を通じて, 教職を志望する学生の確固たる信念づくりが明らかになった。このことは, 国づくりの基本は教育, 教育は教師づくりという考えが基底にあるといえる。この中で本学の役割は学生が抱いた「小学校の先生になりたい」という夢を「小学校の教師として採用されるのだ」という目標に変え, 教職志望の本気度を強めることであると考えられる。そのために, スタディスキルⅡの中で実施される観察実習のように教育現場と連携し, 体感を通して教育の現状を理解させることは重要である。このことは, 夢を目標に変える契機となる。さらに, 目標達成への意欲を高める上から, 教育現場との連携した科目を増加させていくことが必要になってこよう。

(2) 本学の方向

平成23年, 24年に国立私立それぞれの教員養成についてのシンポジウム・パネルディスカッションの開催がネット上に掲載されている^{註2)}。このこ

註2 例えば目白大学では平成23年1月29日の公開講座「21世紀に求められる教師力」で行っている。また, 信州大学では平成24年8月20日にシンポジウム「教員の高度な専門性と実践的指導力を高めるために」で開催している。

付1 本研究は中村学園大学プロジェクト研究(課題名:学生の教育的実践力の深化を図るための教育委員会, 小学校現場との提携・連携の在り方, 代表者田中浩子)として行われたものの1部をまとめたものである。

とは開催趣旨にも書かれているが、「教育は人なり」の言葉通り、教師の資質向上を目指して時代を担う教師の養成の重要性の認識に立脚した1例であろう。本学も最近出された中央教育審議会答申⁴⁾に示された教員養成改革の方向性に沿って、制度改革を待つことなく検討を加える時期に入ったということであろう。「大学自身の改革の姿勢が成否を決めるのである」と審議会にかかわった高岡信也（独立行政法人教員研修センター理事）は新聞への寄稿文¹¹⁾の中で述べている。まさしく次代を担う教師の育成への大学の主体性が問われているのである。

謝 辞

本論文作成にあたり、訪問調査に御協力いただいた各大学の関係者の皆様に対し、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

文 献

- 1) 田中浩子・昇地勝人・中野英雄・日高晃昭・平田繁・山中寛子「教育的実践力を身に付けた小学校教員を育てる養成システムの研究」中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要 第42号97-111 2010
- 2) 高橋超・石原英雄・井上弥・石井眞治・林孝「教員養成学部進路決定に関する研究」広島大学教育実践研究指導センター紀要 第3号1-10 1991
- 3) 柳治男・笠原正洋・松尾智則・石黒万里子・田村知子・野上俊一「教職志望学生の志望動機形成と事前制御の需要に関する研究」中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要 第43号121-131 2011
- 4) 文部科学省「教職全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」平成24年8月28日
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325092.htm
- 5) 岩田康之・金子真理子・坂井俊樹・三石初雄「教師教育改革のゆくえー現状・課題・提言ー」東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター編 11-25 2006
- 6) 小学校教諭教職課程カリキュラムについて 東京都教育委員会 平成22年10月
- 7) 文部科学省「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」平成18年7月11日
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06071910.htm
- 8) 『教育福岡』(No.611) 平成24年2・3月号
- 9) 九州地区大学教育課程研究連絡協議会「教員養成における教育委員会と大学の連携について」福岡県教育センター所長講演資料2012.06.02 於ガーデンパレス
- 10) 平成24年度福岡市立学校教職員採用候補者事前研修会 <http://www.city.fukuoka.lg.jp>
- 11) 高岡信也「教員養成 質を高く」日本経済新聞 2012年8月13日付